

# 子どもの精神分析の現状と未来 ——次世代の担い手をどう育てるのか？

司 会：永田 悠芽（上町カウンセリングオフィス）  
平野 直己（北海道教育大学）  
趣旨説明：生地 新（まめの木クリニック）  
演 者：木部 則雄（こども・思春期メンタルクリニック／白百合女子大学 発達心理学科）  
平井 正三（御池心理療法センター／サポチル）  
藤森 旭人（Tavistock and Portman NHS Foundation Trust）  
池 志保（福岡県立大学 人間社会学部）  
ま と め：日下 紀子（ノートルダム清心女子大学／関西心理センター）  
生地 新

## 【企画要旨】

前回、名古屋大会において「子どもの精神分析的な心理療法の現在」の企画を行い、子ども青年期領域の精神分析の現在、さらに精神分析的な心理療法の実践に関して講じた。ここでは、精神分析は子どものメンタルヘルスを最重視した画期的なものであり、発達障害児、被虐待児などが蔓延した現在でも揺るぎない有用性を論じた。さらに、3か所での異なる臨床領域での精神分析的な心理療法の実践を発表した。出席者は100名以上に及び、そのアンケートによれば、本企画は極めて好評であり、精神分析学会内で子ども・青年期の精神分析に関する委員会の設立が妥当であることが、明確になった。

今回、新潟大会において、「子どもの精神分析の現状と未来」次世代の担い手をどう育てるのかについて講じる。これは本学会の運営委員会の有志メンバーが、企画した。まず、精神分析は現在、児童精神医学の領域では、生物学的な精神医学、操作的な診断基準などが隆盛を極め、殆ど精神分析について一考されることもない。また、心理臨床領域では、認知行動療法や治療教育という現実適応を重視した療法が目され、精神分析への関心は著しく減衰している。さらに、精神分析を学ぶことは長期間の研修、費用、その評価の困難さなどから、積極的に学ぶことのない傾向にある。しかし、精神分析的な知見は、未だに児童精神科、心理療法領域において、意義深いことを論じる。木部は「児童精神医学の中の精神分析／精神分析的な心理療法」、平井は「子どもの心理臨床における精神分析的なアプローチ」について講じる。ここでは、臨床場面での精神分析アプローチに関して、現状を踏まえながら、精神分析が現在でも臨床実践に大きな貢献することを明示する。

次に、我が国では欧米とは異なり、子ども青年期の精神分析的な心理療法を研修ができる学会や協会での組織や仕組みがなく、受け皿がない状態が続いている。まず、藤森は「海外の訓練コース タヴィストック・クリニックでの訓練」について紹介し、その詳細と訓練の意義について論じる。この訓練は第二次世界大戦後、ポウルピイを中心に子どものメンタルヘルスの為に、創設されたものである。しかし、この設立の精神は、未だに私たちが学ぶべきものである。次に、池による「日本の現状 臨床心理士養成大学院の現状」について講じる。大学院の2年は多忙であり、まして精神分析的な心理療法を学ぶ機会は乏しい中、どのように精神分析の意義を大学院生に伝えることへの尽力が語られる。これは、多くの臨床心理士の育成に関わる教員にとっても共通の試練である。

最後に、生地、日下によるまとめと討論が行われる。また、この際、会場からの質疑応答の時間を設けてある為に、積極的にご意見、ご感想を要望している。